

体験版



DISMEMBER
THE NOVEL

DISMEMBER

THE NOVEL

体験版

恵満

口絵・本文イラスト : スガレオン

この物語は成人向けです。
18歳未満の閲覧を固く禁じます。

この物語には出血や欠損・暴力・強姦などのグロテスクな表現があり、
それらに興味の無い方や嫌悪感・不快感を覚える方の閲覧をご遠慮下さい。

この物語によって生じる影響および
それらがもたらす結果については
執筆者は一切責任を負いかねますので予めご了承下さい。

この物語に登場する人物・団体名は全てフィクションです。
また、作品中の犯罪行為および描写は全て架空のものであり
犯罪行為を模倣させる、あるいは助長するためのものではありません。



006 【プロローグ】

014 【第一章 憎悪】

体験版は 30 ページまで

登場人物紹介

万智^{まち}

・
・
・

主人公。父の死因となった切奈を恨んでいる。

雪村切奈^{ゆきむらせつな}

・
・
・

登校拒否のアルバイト少女。負けず嫌いな性格。

西野悟^{にしのだとる}

・
・
・

万智の復讐に手を貸す自称フリーライター。

プロローグ

万智は1分間に3度も壁掛時計に目を遣った。秒針が刻む間隔は異様に長く、眺めているだけで喉が渴いてくる。

年齢の離れた先輩が電話の向こうの相手に平謝りをし、プリンターがA4サイズの紙を吐き出しても、時計の針が進む音だけはフィルタをかけたかのように耳に届く。

眼前のディスプレイでは既に表計算ソフトを閉じており、デスクトップに設定している子猫の壁紙の上を意味もなくカーソルが行き来していた。

今にも小さな尻がクッションを敷いたOAチェアから離れそうだったが辛抱強く待つ。

まだか、まだか……心の中で反芻すること数十回。終業を告げるチャイムが鳴り、万智は手早く帰り支度を始めた。

報告書はページの順番を気に留めないままクリアファイルに押し込み、筆記用具の類は無造作に事務機の引き出しへと放り込む。

「お疲れ様でしたー」

まだ席を立たない同僚を尻目にロッカールームまで走る。

万智が頑なに定時退社しようとすることに慣れてるので誰も咎めるものはいなかった。

女子更衣室に着くなり、袖を絡ませながら事務員用の作業着を脱ぎ捨て、あっという間に着替

える。

さらにロッカーに詰めてあったポストンバックを肩に下げて次は自転車置き場まで駆けた。その途中ですれ違った社員には、煩わしさを感じながらも短い挨拶を交わしていく。

化粧の無い万智は19歳でありながら、童顔と小柄な体軀のせいで中学生と間違えられることが多い。

その容姿で多少なりとも待遇面で得な立場にいることを本人は自覚していなかった。

つまり、色々と大目に見られている。

「おや？ 今日でも急いでるね、お疲れさん」

門を出るときに守衛から声をかけられ、頬の筋肉を無理に引っ張って笑顔で頭を下げた。

愛想を振りまく外面と、それとは全く異なった内面の温度差にストレスを感じつつ、あくまで普通に振る舞う。

そしてペダルを漕ぐ足に力を込めて勤め先の建物を遥か後方へ置き去りにした。

すると心に溜まっていた淀みが晴れ、身体が浮かび上がりそうになる。果てしない開放感から声を上げてしまいうさだ。

歸路の風景は寂れた地方都市のもので、万智の心中とは正反対にくすんだ色をしている。

S市中心の商店街は郊外の大型ショッピングモールに根こそぎ客を取られ、閉まったシャッターがやたらと目につく。

生まれ育った場所に縛られている万智にしてみれば、それらは呪いに等しい。

そいつは古臭さや野暮ったさといった言葉で、何もかも灰色に塗り潰そうとしてくる。

しかし、今の彼女にとっては何細な事に過ぎなかった。暗澹とした現実など吹き飛ばすほどの非現実を手にしたのだから。

時折、賑わっている総菜店や高校生がたむろするコンビニもある。

それらを尻目に万智は急ぐ。動悸が激しくなり、息が切れるのすら構わず進む。

職場から自宅までは約10キロもある。クルマを持っていないので自転車通勤せざるを得ないが苦にならない。

ただひたすら、早く帰りたいとだけ考えている。

街中を抜け、青く伸びた稲が広がる田んぼを抜け、ポツンと一軒だけ建っている自宅へと辿り着いた。

塀に囲われた古びた平屋は世事にも綺麗とは言えず、庭も殆ど手入れされていない。

もともとは農家だったらしく、納屋まである。

一人で住むには十二分に広いものの、そのせいで掃除や整理が追いつかないでいた。

自転車は門柱の傍に置き、玄関を開けてポストンバックを置き去りにして一番奥の部屋を指す。軋む廊下は埃が溜まっていて、万智の駆け足がそれを舞い上げた。

最奥にあるのはカーテンを全て締め切った6畳の部屋だ。フローリングの上には柵も椅子も、何一つ家具が無い。

ただ人間が1人、部屋の中央にいただけだった。

「ただいま、切奈」

足音でとうに気付いていたのか、切奈と呼ばれた少女は目だけで万智を見遣った。

しかし、相手の姿を確認しただけですぐに俯いてしまう。

「いい子にしてみた？」

「……」

答えない切奈に構わず万智は抱擁してやった。

薄手のシャツ越しに伝わってくる切奈の肉の感触が心地よい。

しばらくそうしていると部屋の臭いに気付き、後始末をしようと出入り口に用意しておいたビニール袋とスコップを手取る。

部屋の中にはトレイが何個も並べてあって、その中にはペットのトイレ用の砂が敷いてあった。

万智はその一部をすくい取ると新しいものを補充してやった。

その次は食事をさせてやらなければならぬ。

世話を怠ったら切奈は死んでしまう。そんなことは嫌だった。万智は切奈のことが大好きなのだ。

だから食べ物全部、口移しで与えている。よく咀嚼してやることが愛情だと思っている。

しかし、切奈は吐き出してしまうことも多い。今朝もそうだった。

今日は栄養価が高くて食べ易いものにしてやろう。

「ゴハンあげるからちよっと待っててね」

そう決めた万智は冷蔵庫に大量に保管していたタンパク質入りのゼリー飲料を持ってくる。

先ずは自分の口に含み、それから両手で切奈の側頭部をpushさえた。首を振って逃げるこゝろがあ

るので仕方なくこんな方法をとっている。

万智は頬の筋肉に力を込め、ゼリーを送り出していく。

すぐ前にある切奈の整った顔が歪み、しかしロクに抵抗も味がないまま呻きながら食事を受け入れていった。

「んっ……」

舌を絡め、相手の口蓋を舐め回す。ゼリーが切奈の唾液と混ざって甘い味になった。万智はそれを自分の喉にも通す。

しかし食事を与えるペースが早かったのか、咳き込んだ切奈の唇から白濁色のスジが垂れ落ちる。

顔を離れた万智は下腹部が段々と熱くなっていくのを感じながら、ハンカチで口元を拭いてやった。

肌からは血の気を失い、目の光もなく、口元にだらしなく白い液体を零している。

「……」

そんな様子に我慢が出来なくなり、今度はただただ切奈の身体を貪った。

無言のまま手のひらに収まらない胸を乱暴に揉み、円錐に尖った乳首を舌で弾きながら弄んで吸い込み、股間に指を這わせる。

やがて粘膜の合せ目から水音が聞こえてきた。

同時に万智の息が荒くなっていく。さらに神経が昂ぶって身体の末端がより多くの血を求めてきた。

絶え間なく脈打つ心臓はさらに多くの仕事をする。

愛撫を続けるうちに切奈が小さく仰け反り、粘性のある雫が溢れてきた。

「イッチャった？」

楽しそうに声をかけてやるが返事は無い。その無言がさらに燃料となって興奮を高めていく。万智は右手で切奈の肌を撫で回しながら、左手の指先を自分の下着の中に入れる。

とうとう自分を慰め始めた。そうでもしない限り、身体を蝕む欲情は消えそうにない。

切奈のいる部屋は24時間、空調を効かせている。外よりも涼しい筈だが汗は止まらなかった。勃起した赤い肉芽を摘み、秘部に人差し指を第二関節の深さまで出し入れし、万智もまた同じように甘い蜜を垂らす。

静かに、淡々と、薄暗い中で互いに絶頂するまで歪んだ性行為は続いた。

やがて満足した万智は上気した顔でへたり込み、切奈の姿を見上げる。

部屋には単管パイプで組み上げられたジャングルジムのような構造物が鎮座していた。

切奈は豊満な胸やピンク色の女性器を晒した全裸のまま高所作業用のフルハーネス（落下を防ぐために身体に巻き付けるベルトである）を装着され、そこから吊り降ろされている。

ベルトのバックルを手で外せば、床に落下こそするものの逃げられそうなものだ。

しかし、彼女にはそれができない理由があった。手を拘束されている……わけではない。

「綺麗だよ、切奈」

その美しさに溜息をつく。

瑞々しくて若い肉体は女性として完璧な魅力を備えていた。しかし、邪魔な部分もある。

蛇の絵に脚を描くことを蛇足という。国語の授業で習った。

今の切奈は余計なものが一切無い。

「……食事の途中だったね。もうひとつゼリーあげるから、いっぱい食べてね」

もっといっぱい食べてもらわないといけない。最近、食が細っているから尚更だ。

万智は2個目のゼリー飲料を取りに台所へ向かう。

だが、金具がこすれる微かな音がして背後を振り返る。ハーネスで吊るされた切奈の身体が僅かに揺れていた。

どうやら動こうとしたらしい。

「無駄だよ」

優しく微笑んでやる。その奥には決して覆ることのない強弱関係から来る余裕があった。

「切奈は一生、ここで過ごすの。逃げるなんて絶対にできない」

こいつは絶望を理解できない。

今更、言葉責めをしたところで大差ないだろう。

それでも愉しくてついつい、からかってしまう。

「手足を切り落とされたんだから、もう何もできないでしょ？」

今度は嗤ってやった。

その声に反応したのか嗚咽が漏れる。

腕も、脚も、切奈には無かった。上腕の先と大腿の先はぽっかりと欠けていた。その上を革製の

のカバーで覆っている。

この先もずっと逃げ出すことも出来ず、口移しで餌を与え続けられ、排泄を床に垂れ流し、万智の禍々しい愛情を一身に受け止め続けなければならぬ。

四肢を切り落とされて裸で吊るし上げられた少女は、繰り返される悪夢に涙を流した。

第一章 憎悪



雪村切奈にはストーキングされているという自覚が無かった。

成績優秀な彼女が学校へ行かなくなり、代わりにアルバイトに精を出すようになったのはここ2ヶ月ほどのこと。

そのバイト先というのは所謂『メイド喫茶』である。

ブームに便乗して開店した経緯ではあるが、地方都市に在りながら未だに潰れずに営業していた。

もともとは老店主が営んでいた喫茶店を引き継いだ現オーナーが少しばかり店舗に手を入れ、若い女性を雇ってメイドのコスチュームを着せている。

雰囲気は使用人のいる館ではなく純然たるカフェであり、口煩い客ならメイドが何たるかについて説教でも垂れそうだった。

だが明るくてカジュアルな雰囲気はターゲットにしているサブカル層以外にも受けが良く、何よりサンドイッチとコーヒーが美味である。ごく普通に見える年寄りが新聞を広げている姿は、この手の店には珍しいだろう。

この辺りはオーナーの純然たるセンスの代物だ。特に従業員の女の子のルックスと接客態度に

対しては厳しい。

そして厳しいなりの対価を支払ってくれた。何かと金銭的な面で苦勞の多い切奈はバイト代の良さに反応して飛びついたクチだが、今ではそれなりに乗り気で仕事をこなしている。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

エプロンを当てがってウェストを絞り、お辞儀をすれば下着が見えてしまうのではないかと思えるほど短いスカートを翻し、膝上まであるニーソックスを履いて接客する。

清々しいまでに扇情的な衣装も、お金のためと解釈すれば納得できた。生憎と切奈にはそんなものを喜ぶ連中のがよく分からない。しかし需要があるのだから供給されるのだろう。

本名をもじって「ゆきな」とバイト中は名乗り、やや間が抜けてはいたが平仮名でそう書かれたネームプレートを胸のあたりに留めている。

(さて、お仕事。お仕事)

冷え切った心とは乖離した笑顔で客を出迎えると（※男性客のことは『ご主人様』と呼び、女性客のことは『お嬢様』と呼ぶのが店のルールだ）、先ずは相手の反応を探る。

初めての客なら少し恥ずかしそうに、慣れた客なら妙に堂々と入店してくるのだ。

そこからどう接客するのか、切奈の中ではルーチンが出来上がっている。

しかし、今回はそのどちらにも当てはまらなそうだ。

お嬢様と呼ばれた黒髪の少女は落ち着きなく店内を見渡し、出迎えてくれた切奈の方を横目で見てあとはレジへ視線を固定する。

年齢は中学生くらい。ポストンバックを下げた地味な格好の女の子だ。化粧っ気は無く、オシヤ

レにも無関心のようなのである。さらにメガネが容姿の野暮ったさに拍車をかけ、気弱そうな見た目をさらに悪い方向に向けてしまっていた。

彼女は新居に放り込まれた子猫のように居心地悪そうに固まっている。期待しているようには見えず、自ら入店したくせに不審なオーラすら滲ませていた。

もしかしてアルバイトの応募で来たのだろうか。切奈は思案してみる。

仮にアルバイト希望者だったとしたら不採用になるのが目に見えていた。オーナーの眼鏡に叶うとは思えない。

では客だとしたら……態度は妙ではあるものの、丁寧に接する分にはマイナスにならない。

「お嬢様、当店は初めてですか？」

おかえりなさいと言ってしまった出迎えとは相反するが、このままレジ前でフリーズされていたのでは溜まったものではない。

しばらく硬直していた少女は油を注し忘れた機械の如く、ギギギと音を鳴らしながら切奈の方へ顔を向けた。口角を強張らせたまま辛うじて頭を下げ、「はい」という意思表示をする。

その様子があまりにも滑稽だったのでクスッと笑ってしまった。接客業に有るまじき行為だったが常人以外は誰も気付いていない。

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。まずは席までご案内しますね。こちらです」

とりあえず、席に着いてもらおう。そう考えた切奈は窓に面した一番奥の席まで案内する。後にくる少女の動作はぎこちなく、一昔前のロボットが中に入っているのではないかと疑いたくなかった。

切奈は自らの経験を探って、ある仮説を立てる。

根拠は直感だけが意外と当たるものだ。

これだけ緊張しているが実はプライドが物凄く高いのではないだろうか。失態を見せたくないという気持ちが過ぎて血液の巡りが悪くなっているように思える。

それに見た目からも少女はオタク然としていて、コミュニケーションが苦手そうだった。容易には心を開いてくれそうにない。

だとしたら笑ってしまったのは失策である。

とりあえず自分の感じたことを信じて、なるべく敬っているような動作で椅子を引いて少女に座ってもらう。目を伏せて頭を下げた切奈が待つまでもなく、少女は着座してくれた。

ボストンバッグからはガチャガチャと金属が擦れる音がして、重々しく床に置かれる。

(随分と重そうな荷物……)

余計な推察はさて置いて丁寧にメニューを開き、差し出す。彩り鮮やかな料理の写真が少女は左上から順に眺めて考え込んでいた。

その間にお手拭きと水の入ったグラスを置き、少しだけ待つ。何やら唸っていて半眼になっている。

どれにするか迷っているのだろう。切奈は助け舟を出すことにした。

「お嬢様、オススメはオムライスになっております」

メニューの右下にある卵のドームを指して、小さく首を傾げてやる。本当はもっと長い名前なのだが余計な部分を省いて伝えた。

提案にキョトンとした少女は両肩を持ち上げて力いっぱいオムライスを指差す。怯えているようにも見えるが心中は分らない。

「お飲み物はどうされますか？」

今度はメニューの最後のページを開いてやる。少女は迷わずオレンジジュースを指し示した。即座に意思表示したことにやや驚いたものの、迷わなかったということは好物なのだろう。

もっとも、見た目から子供なのだからコーヒーや烏龍茶の類を頼むとは考え難い。

「ご注文を繰り返させていただきます。オムライスが1つと、オレンジジュースですね？ お飲み物は食事の前でよろしいですか？」

「……」

口を紡いだままうなづき、また落ち着きなく店内へ視線を送り始める。オーダーを厨房へ伝えようと切奈は遠目に少女を観察してみることにした。

土曜日の半端な時間のため客は少なく（常連で長居するような人ばかりいる。定期的にドリンクを注文してもらうのが店のルールだ）、幸いなことに人手は足りている。少しくらいサボタージユしても怒られないだろう。

この手の店は本当に初めてなのか、あるいは極度のコミュ障か。どちらとも判断できない。目に入るものを珍しそうに見る様は小動物のようで段々と愛らしく思えてきた。

そんな彼女の元へまずはオレンジジュースを持っていく。黙ったままストローを刺し、少女は少しだけそれを飲んだ。チラリと切奈を一瞥だけして、すぐに視線を外す。

（ちよっと変わった子だけど……）

色々な客が来るが、特に風変わりな彼女の境遇や心の内側を想像してしまう。

しかし、今はアルバイトの時間なのだ。いつまでも思考に耽っているつもりは無かったのである程度のところでは区切りをつける。

そして次に入ってきた若い男2人組の客を甘い声で迎え入れ、同じように注文を取った。

記憶にある限りでは初めての客である。彼らの視線は完全に切奈の胸元と太ももを行き来していたが、来月に振り込まれるであろう給与の額面を思い浮かべながらスルーした。こういうところで嫌悪感を滲ませないので接客業に向いているのかもしれない。

流石に触られたり、出待ちされたときにはオーナーに相談して厳粛に対処してもらうことにしている。過去に何度かあったことだが、そういう客は出禁になるのだ。

(それはともかく仕事、仕事……っと)

注文を取って愛想笑い。ある意味ではルーチンワークと言えた。

さて、そうこうしているうちに厨房からオムライスが出来上がる。卵の黄色に添え物の緑が鮮やかで表面はフワフワ、中はトロトロの絶品だ。

あの気難しそうなお嬢様も気に入ってくれるだろう。

早速、テーブルまで運ぶと湯気立つ皿にお嬢様が目を奪われた。

それまでの気難しそうな印象から、年相応の表情へと変化していくのが面白い。

ここであと一押ししてやる。オムライスとセットになっている、この手のお店ではメジャーなサーブスだった。

少し悪戯っぽく口角を持ち上げて取り出したるはケチャップ。切奈はそれを両手で頬の横まで



持ち上げ、首を傾けた。

「オムライスにお名前を描いて差し上げますね」

「！」

明らかに狼狽えた。少女は赤々とした容器と、いずれキャンバスとなるオムライスを交互に見て「本気？」と目だけで訴えてくる。そういうものがあるという知識は備わっていたのだろう。

まったくの不意打ちというよりは、知ってはいたが自分では頼まない……といった様相だ。

「サービスですから♡」

湯気が立つ中で彼女は考え込み、やがて観念したのか俯いて自分の名前を告げる。

「まち……」

「はい、わかりました♡」

ゆったりと大きな弧を描き、普段であれば絶対に使わないような丸字で『まち♡』と綴ってやる。みるみるうちに少女の顔は赤くなっていく。

そして耐えられなくなったのか、小さな身体に似合わずに一気に平らげてしまった。

ろくに咀嚼もせず、熱々のまま喉を通って最後はオレンジジュースで流し込むともの数分で食事を終えて会計へと走ってしまう。

重そうなポストンバッグを引き摺りながら店外へ飛び出して行くまでの一連の動作はコメディ映画のようでもあった。

その様子を半ば呆然と眺めていた切奈だったが、『まち』と名乗った少女が嵐のように過ぎ去ったことに少し悪いことをしたかなと反省する。

何となく……幼い頃の自分に似ていた。やたらプライドだけがなくて弱みを見せたがらず、意地をはっていた頃に。

(次は……もし来てくれたら、もっとゆっくりしていてもらおう)



メイド喫茶を飛び出した万智は近くのスーパーマーケットのトイレに駆け込み、湿ったタイルの床にポストンバッグを下ろすと便器目掛けて吐瀉する。鼻をつく臭いに咳き込み、苦しみながらしばらく嘔吐を繰り返す。

そして胃を焼いていた内容物を一瞥もしないまま流すと、手の甲で口元を拭って嗚咽を漏らした。悔しさに震え、自分の情けなさに涙する。

いっそ、このまま父親の後を追って死んでしまおうかと迷い、ポストンバッグの中からカッターナイフを取り出した。洒落っ気も何もないその中には他に金槌やノコギリ、あるいは用途の分からない刃物などが詰め込まれている。

いずれもホームセンターで手軽に買うことができる凶器だった。

しかし、万智はそれらを何一つ振るうことなくあの店を去ってしまった。

意気地なしの彼女が思い立ったように自殺できるわけもなく、数分間はカッターナイフの刃を凝視していたがやがて疲れてへたり込んでしまった。

あるのは殺意だけで、実行するだけの技術も何も持っていない。

あらためてその事実を突き付けられた万智はうな垂れ、酸味と甘味が混じった口を濯ごうとトイレの個室を出る。洗面台に備え付けられた鏡には黒髪・眼鏡の、貧相な体格の女が写っていた。大して可愛くもなければ整っているわけでもない、垢抜けない自分の容姿が大嫌いだった。よく中学生に間違えられることがあり、その度に19歳でもうすぐ成人するのだと伝えることすら億劫になっている。

そんな自分をあまり眺めていたくないので、眼鏡を外して顔を洗う。

口蓋に含んだ水道水は不味くてすぐ吐き出してしまったが、まだ鼻腔の臭いが抜けないので何度も短くうがいした。

その様子を奇異な目で見る妙齢の女性を無視し、ようやく落ち着いた万智は重い荷物を手にスーパーマーケットを去る。特売品もタイムセールすらも目に入らなかった。

近寄りが見たい空気を纏っている自覚はあったものの、すれ違った小学生と思しき男の子の集団に指を指され、ひそひそ話をする主婦たちの視線が刺さり、とにかく苛立ちばかりを募らせながら歩いた。

ふと、先ほどのメイド喫茶の店員の「ゆきな」の顔が浮かぶ。

背が高く、大きな目をした派手な顔立ちでプロポーションもメリハリがある。表情も明るくて人懐っこく、やたら露出の高い衣装で給仕をしていた。いかにも男好きしそうな売女である。

本名は「雪村切奈」という。2駅離れた高校へ通う学生だが、現在は不登校となっていて日中もブラブラしている。

そいつは万智にとって殺さなければならぬ相手であり、この世界に存在してはいけない異物だった。

妄想の中では何度も、何度も繰り返し殺した筈である。泣き喚いて命乞いをする切奈の頸動脈にノコギリを引き、無様に飛び出した血流に大笑いした。

あるいは土下座をさせた彼女の頭を金槌で割って、陥没した頭蓋をさらに蹴って大きく歪ませてやった。

それらは全て万智の脳内の電気信号でしかなく、現実の切奈は今もああして剣呑と息をしている。それが許せなくて震えた。

どうして、万智の父親を死に追いやった女が今も生きているのか。この世界には正義も何も無いのか。

ならば自分がやるしかない。然るべき報いをあの女に受けさせる……つもりだった。

しかし、実際に切奈を前にして凶器の1つも取り出せなかったのは、そんなことをしたら取り押さえられて警察に突き出されるという想像が働いたからだ。

勿論、敵の胴体と首を切り離すための道具を選んでいる最中もその予測はできていたものの、全ては衝動的な行動に過ぎない。

幸いにして店に入ってからドス黒い感情は一切薄まることなかったものの、何よりも保身がブレーキとなって思い止まった。

あの場で殺しきることなど無理だったと自身に言い聞かせて納得しておく。

ただし、名前まで知られた上に割高なオムライスとジュースに金を払う羽目になった。しかも

全て嘔吐してしまったのだから完全な無駄金である。

それらは屈辱として身体の芯へと染み込んでしまった。

(ちくしょう……)

声には出さない。声を出すことはそもそも苦手だ。

足取りは次第に重くなり、離れた場所にある駐輪場まで戻るのがひどく時間がかかってしまう。これから自転車で帰宅するのはさらに億劫だった。

ビルとビルの隙間に申し訳程度に作られたスペースに停めておいていた自転車の前には誰かが突っ立っていた。

万智は自分のサドルに右手を乗せて、左手でスマートフォンを操作している若い男がいることに絶句してしまう。

一言でも、手を退けてほしいと伝えれば済むのだが万智にはそんな気概が無い。

遠目に男を観察して、しばらく時間を置いて戻ってみたが、やはり同じようなポーズのまま若い男はそこに居残っていた。

ただでさえストレスに蝕まれていた万智の胃袋は内側から押し上げられるように捻れ、いじめが原因の潰瘍に悩まされていたことがフラッシュバックして悲鳴をあげる。

このままでは家に帰ることすらできない。

これ以上は耐えられない。

万智は意を決して男の傍まで歩み寄ると震える声で抗議した。

「そ、そその自転車……あたしのです」

告げた途端に男は微笑みとも嘲笑ともとれない笑みを浮かべる。

その笑顔にどんな意味があったのか万智には読み取れなかった。

年齢は30代半ばくらい。Tシャツにジーンズという凡庸な出で立ちだったが、流行りに合わせた髪型のせいでイケメンに見えなくも無かったが老けている。

高価そうな腕時計以外にアクセサリーは身に付けておらず、不思議なほど淡泊で影の薄い人物に見えた。

少なくとも話は通じそうな雰囲気だったので、万智も合わせて作り笑いしてしまう。

「万智さんだね？」

「えっ……」

やや濁った低めな声で名前を呼ばれ、万智は凍り付く。この男と過去にどこかで会ったことがあっただろうか……記憶を遡っても分からない。

あるいは印象に残らない見てくれのせいで覚えていないだけかもしれない。

どうすればいいか分からなかった。跳ね上がる心臓を抑え、万智は男の次の言葉を待つ。

「君の復讐に協力しよう。ただし、ある条件を呑めば……ね」

あまりに意外な言葉を耳にしてポストンバッグを落としてしまう。

誰にも話していない。雪村切奈への復讐計画は、誰にも話していない筈だ。

それこそ万智の脳内だけの話である。どうやって漏れたのか全く分からず、混乱してしまう。だからか、反射的に聞き返した。

「あなたは一体……」

「条件その1だ。僕の正体は詮索しないこと。でもまあ、偽名でよければ教えてあげるよ」

若い男はまた笑う。よほど穿った見方をしなければ無害な表情の筈だ。

しかし、今度はそれが嘲笑であると万智にはハッキリと伝わっていた。

「あの……私、帰る途中なので……」

関わらない方がいい。直感がそう告げてくる。万智は半ば強引に相手を押し退けて自転車を引き出すと、その場から逃げようとした。

男の方は困ったように後頭部に手を当て明後日の方向に視線を送る。

「まあ、こんな怪しい奴を信用しろってのが無理な話だよな」

「し、失礼します!」

つい先程までせり上がってきた不快感すら恐怖で忘れてしまった。慌ててペダルを踏んだせいでバランスを崩して倒れそうになりながら、人通りの多い方へと走り去る。

「僕が用意したのは、楽しいゲームとそこから派生する作品だ。詳しくはそのタブレット端末を見てくれ」

背中から声をかけられ、ハンドルの前に取り付けられたカゴに視線を落とすと何やら長方形の板が入っているではないか。それが男の指すタブレット型のコンピューターだと気付いて、慌ててブレーキをかける。

そんな得体の知れないものはずぐにでも突き返してやりたかった。

しかし、万智が狭い駐輪場を振り返ったときにはもう彼の姿は見当たらない。

その場で右を2回と左を2回、さらに自転車を降りて奥の路地まで覗き込んで確認したが男は

忽然と姿を消してしまっていた。

(一体、何なのよ……)

寒気に襲われた万智はそれ以上、何も考えたくないと思った。



一心不乱に自転車漕いで自宅まで戻った。途中でトラックの前を横切ってしまい、クラクシヨンを鳴らされてさらに心臓が締め付けられる。

だが、あの男の不気味さから比べればどうでもよかった。切奈に対する失敗もあって、一刻も早く全てを忘れてしまいたい。

家に着くなり自転車を門柱の横に乗り捨て、ガチガチ震える手で玄関の鍵を開けると乱暴に靴を脱いで台所へ急いだ。

不眠症に悩む万智は医者から睡眠導入剤と精神安定剤を処方されている。

適当なスナック菓子と水と一緒に、いつもの3倍の量の薬を飲み込んだ。しかし昂ぶっている神経のせいでいつまでも眠くならず、さらに言えば太陽すらまだ落ちていない時間である。

ただただ自分の不甲斐なさを恨みに転換して意識が落ちるのを待ち、次に目が覚めたときには深夜だった。

「なんで……私がかんな目に……」

苛立って眠れず、眠れないから苛立つ。そんな悪循環がずっと続いている。

自分の中のドス黒いものがどんどん膨れ上がっていくのを自覚しながらも、その矛先はいつも決まった方角に向いていた。

「ゆきむら……せつな……」

あいつさえいなければ。あいつさえ。

あいつのせいで。あいつがわるい。

「お父さんを殺したあいつも死ねばいいんだ」

充血した目で、四つん這いのまま廊下まで出る。自分が疲れているのか、それとも快調なのか、身体が重いのか、軽いのか、上を向いているのか、下を向いているのか、一体どうなっているのか。やはり、店で襲いかかって殺すべきだった。けれど武器を入れたポストンバッグはどこにも見当たらない。

その代わりなのか、見覚えのないタブレットPCが玄関に置いてあった。

真っ暗闇の中で光るそれは自分を導いてくれるような気がする。

画面を覗き込めば何かのアプリが立ち上がっていた。英語が苦手な万智には読めなかったが、サムネイルを何気なくタップすると音声なしでノイズ混じりの動画が再生される。

時折、画面がチラついて何かが見えた。人の形と砂嵐が交互に流れ、万智は画面に釘付けになる。映像は次第に鮮明になっていく。そして何が映っているのか判明した瞬間、万智は大きく目を見開いた。

「これって……」

14、5歳くらいの見知らぬ少女が磔のまま男に殴られ、青痣を作っていく。
そんな映像が無編集で流れ続けた。時折、画面が切り替わると暴力を振るわれている人間が
変わっている。

意味不明なその動画に、しかし万智は強く惹かれ、いつの間にか自分を慰めていた。